DOCUMENT RESUME

ED 292 265 EC 202 047

AUTHOR	Wakaba, Yoko
TITLE	Research on Mother-Child Interaction of Stuttering Children. Preliminary Observation.
INSTITUTION	Tokyo Gakugei Univ. (Japan). Research Inst. for the Education of Exceptional Children.
PUB DATE	87
NOTE	8p.
PUB TYPE	Journal Articles (080) -- Reports - Evaluative/Feasibility (142) -- Reports - Research/Technical (143)
LANGUAGE	Japanese
JOURNAL CIT	RIEEC Report; v36 p37-44 1987
EDRS PRICE	MF01/PC01 Plus Postage.
DESCRIPTORS	*Behavior Patterns; Foreign Countries; *Interaction Process Analysis; *Mothers; *Parent Child Relationship; Parent Role; *Stuttering
IDENTIFIERS	Japan

ABSTRACT

The study examined inadequate behaviors of Japanese mothers with their stuttering children. Video tape recordings of playing situations of five stuttering children (ages 3-5) and their mothers and five non-stuttering children and their mothers were evaluated using two rating check lists. Results found differences in the behaviors of the two groups of mothers, with mothers of stuttering children often demonstrating inadequate behaviors. (Author/DB)

****
* Reproductions supplied by EDRS are the best that can be made *
* from the original document. *
****

U.S. DEPARTMENT OF EDUCATION
Office of Educational Research and Improvement
EDUCATIONAL RESOURCES INFORMATION CENTER (ERIC)
☑ This document has been reproduced as received from the person or organization originating it.
☐ Minor changes have been made to improve reproduction quality.
• Points of view or opinions stated in this document do not necessarily represent official OERI position or policy.

すをはよみ 価ひを通目み目ッ来も会こ配園 会 ご は g. 5. –
ED292265
EC 202047

RESEARCH ON MOTHER-CHILD INTERACTION OF STUTTERING CHILDREN
– Preliminary Observation –

Yoko WAKABA

Tokyo Gakugei University

ABSTRACT

Many researchers have pointed out problems in mother-child relations of stuttering children. Video tape records of mother-child interaction during playing situation are useful data for diagnosis and therapy concerning stuttering children and their mothers. There has not been objective research done using video tape as a tool for finding out inadequate behaviors of mothers to their stuttering children in Japan.

This research was conducted in order to objectively find inadquate behaviors of mothers to their stuttering children.

Video tape recordings were used for the observation and the evaluations of the mothers' behavior in interactive situation with their stuttering children. Video tape recordings of playing situation of 5 stuttering children and their mothers and 5 normal children and their mothers were used for the observation and the evaluations. Three observers conducted the observation and the evaluations.

For the observation, they used 16 items of inadequacies found within previous observations of IO video tape recordings of mother-child interaction of stuttering children, with ages from 3 to 5, at playing situation. For the evaluation, two kinds of rating check lists made by the author were used.

The result of this observation made clear the differences between behaviors of the mothers of stuttering children and behaviors of the mothers of normal children. It pointed out that the former showed many of the items of inadequate behavior.

Results of the evaluation of a check list showed features which made construction of the whole figures of mothers of stuttering children possible. The use of another check list was found to be effective for knowing verbal behaviors of mothers to stuttering children. Items used to pick up inadequate behaviors of mothers to stuttering children were proved valuable.

At the next stage, more subjects should be observed because the number of subjects for this research was few. Statistical analysis will be helpful if applied so that many items from the observation and the two kinds of rating check lists can be reduced and composed into groups.

Key words: stuttering, children, mother-child interaction, mothers' behavior, observation

"PERMISSION TO REPRODUCE THIS MATERIAL HAS BEEN GRANTED BY
Kietsu Fujiwara
TO THE EDUCATIONAL RESOURCES INFORMATION CENTER (ERIC)."

特殊教育研究施設報告
1987, 36, 39-46

認知・語用論的アプローチによる言語指導の試み(II)

――話しことばをもたない3事例に対するごっこ遊び場面を媒介にした指導――

長崎　勤*　飯高京子*　竹内聖子**
松井尚子***　今井常晶****

キーワード：言語指導　認知・語用論的アプローチ　買物ごっこ

<問題と目的>

有意味語を獲得していない発達遅滞児に対し，様々な言語指導方法が行なわれてきたが，大きな方向としては，次の2つがあろう。1つの方向は，個別指導による物の操作や絵カード提示による，概念形成や，ラベリングの獲得を中心にした指導方法によるもの (Lovaas 1977, 小林 1980, 小寺他 1979 等)である。もうひとつの方向は，1対1あるいは集団場面での対人的コミュニケーションの形成（若葉 1978, 田中他 1986 等）や，行動分析法による伝達行動の形成に重点を置くもの（藤原 1984, 出口他 1985 等）である。しかしながら，前者では個別指導で獲得した言語が，他の集団場面や生活場面での般化がしにくかったり，対人的文脈での使用に困難を示すことが少なくないことが指摘されている (Cooke, Cooke, & Apolloni 1976)。一方，後者では，コミュニケーションの形態や機能は評価されるが，コミュニケーションの媒介となっているあそびの認知的水準については問題とされることは少なかった。

しかしながら，近年の初期言語発達研究が示唆している点は，言語が，動作や音声による前言語的なコミュニケーション行為の前提によって形成されることであり (Holliday 1975, Bruner 1983)，かつこのようなコミュニケーション行為には，物の永続性，因果性，象徴機能といった認知機能が，密接に関連しているという点である (Bates 1975)。このような知見から，前述の二者の指導方法を検討してみると，一見対立するようにみえる双方の指導方法が，実際には，初期言語発達の一側面を強調した指導方法であったといえよう。

この10年間の乳幼児発達研究，初期言語発達研究の成果を言語獲得に困難を示す障害乳幼児の指導方法の検討に適応するとすれば，上記のような，言語発達における伝達機能と認知という，2つの重要な側面を考慮した指導方法が検討される必要がある。すなわち，対人的なやりとりや伝達行動が生起しやすく，かつそこにおける行動が各自の認知的発達水準の最近接領域にある課題場面を設定する必要がある。そのことが子どもの活動への動機づけを高めることにもなる。

大井・大井(1986)は，言語発達遅滞児に対して物のやりとり場面を統制的に設定しそこでのやりとりの達成と，言語の使用についての指導方法とその結果について報告している。また国兼ら(1985)は，精神遅滞児に対してやりとり場面を用いた言語の獲得過程を分析している。また，欧米圏においても，このような障害児の発達をふまえた，語用論的アプローチによる指導方法が近年多くみられるようになってきた (Gallagher & Prutting 1983)。

長崎ら(1986)は有意味語をもつが，言語使用に困難を示す3事例に対し買い物ごっこ場面を用いて指導を行ない，言語使用の形態や主導化に一定の改善が認められたことを報告したが，今回は有意味語をもたない発達遅滞児に対し，同様の考え方による方法によって指導を試み，指導経過と，本指導法の妥当性について検討する。

なお，本研究では，行なわれているあそびの達成度，また，だれが，だれと，何をしているかといった相互交渉の場面や状況の空間的，時間的，社会的認知を含めて「認知」的側面とし，言語および前言語的なコミュニケーションのやりとりの形態と機能について「語用論」的

* 言語障害児教育研究部門
** 東京学芸大学大学院
*** 松が谷福祉会館
**** 新宿区立北山伏区民福祉会館

側面とし，両側面を統合した指導形態を認知・語用論的アプローチと呼ぶことにした。

＜方法＞

1) 対象児 (Table 1)：指導開始時，生活年齢5歳の男児2名と4歳の女児1名。IS（男児）：課題場面からの逃避が多い。表出面に比べて理解面は高い。表出は /ana/, /da/ 等未分化な喃語中心で身振り表現は多い。MC（女児）：周囲からの働きかけに無反応なことが多く自発的探索も少ない。発声は語尾，語頭の模倣がわずかにある程度である。MM（男児）：多動で自閉的傾向を強く示し，対人的なやりとりが困難である。明瞭な話しことばはほとんどない。また全員が知能検査ではMAが2歳前であったが，津守式発達質問紙によれば言語理解や，探索は発達年齢が2－3歳であった。

2) 指導の日時：1985年5月より1986年2月まで原則として週1回計23セッション行なわれた。午後1時より本研究対象児3名と，話しことばをもつ言語発達遅滞児3名計6名の幼児（4歳－5歳）に自由遊びを含む中集団指導が40分間，1時45分より個別指導が30分間，2時15分より本研究対象児3名に小集団指導が30分間，2時45分より母親指導が15分間行なわれた。本アプローチによる指導は小集団指導時に行なわれた。

3) 指導プログラムの設定方法

(1) 指導プログラムの設定手続き：①指導開始時の諸検査，行動観察から各児の発達水準を評価し問題点を把握する。②各児の認知水準を考慮してコミュニケーションが生起しやすいと思われる遊びの場面を設定し，各児の指導目標および評価項目，援助方法を決める。③プログラムの実施から各児の行動を評価し，各児の指導目標および遊びの内容や方法を修正する。

(2) 指導プログラムの設定内容：本研究では指導開始時の評価よりⅠ期（5月－10月）に買い物ごっこを設定した。場面は＜店＞と＜家＞とからなり対象児は＜売り手＞か＜買い手＞を選択する。達成行動は，＜買い手のあり方＞，＜売り手のあり方＞，＜役割の選択＞，＜数・記憶＞，＜誘い掛け＞等の項目によって評価される。各項目は行動の構造分析によって，4－5段階のステップによって構成されている。目標となる行動が達成される度に指導目標は高次化された。各評価項目については原則的に身体援助から言語援助，最終的には援助なしでできるように指導した。対象児（以下C）1名に対し指導者（以下T）が1名（もしくは2名）が活動を援助した。

Ⅱ期（11月－2月）にはバスごっこを設定した。それは買い物ごっこで買い手－売り手間のやりとり遊びが達成されたため，バスに一緒に乗る，バスを一緒に押すなどの協同遊びの展開に移行するためであった。場面は＜バス＞と＜家＞および＜動物園＞からなる。家と動物園とは道路で結ばれ途中には信号機がある。対象児は＜乗り手＞がバスの＜押し手＞を選択する。達成行動は＜乗り手のあり方＞，＜押し手のあり方＞，＜役割の選択＞，＜信号の理解＞，＜誘い掛け＞等の項目によって評価される。ステップの構成と指導方法はⅠ期と同様である。

4) 指導経過の分析方法

評価項目についてはセッション毎にチェックリスト，行動観察記録用紙に各セッションにおける各児の行動を記録し，コミュニケーション行動については買い物ごっこ2回（Ⅰ期，第4回セッション；以下S4, 及びS8）バスごっこ（Ⅱ期 S4, S11）計4回についてVTR録画し最初の20分間を分析に用いる。(1)コミュニケーション行動は後藤(1976)を参考にし「インタラクションの形態」としてA水準：1往復以上のCからの自発的なやりとり（C→T→C→T→），B水準：1往復の自発的なやりとり（C→T→C→），C水準：コミュニケーション不成立となる一方的な自発的働きかけ。同様にして他児，Tからの働きかけに応じる応答的やりとりとして㋐水準：(T→C→T→C→)，㋑水準：(T→C→T→)，㋒水準：他

Table 1 対象児

	田中ビネー		津守・乳幼児精神発達質問紙（1～3歳）											生育歴上の問題点	母親・家族構成	発語への経過
	CA	MA (IQ)	運動	探索	大人受修	子供受修	食事	排泄	生活	理解	言語	CA				
IS	5:2	1:11(37)	30	36	24	21	36↑	36↑	36↑	30↑	21	0:11		3歳6ヶ月の時に，妊娠の遅れを主訴として，当施設へ来所。	父(42歳)公務員 母(35歳) 姉(8歳) 母親は，本児に対する要求が強く，情緒的にも不安定である。	依存的行動が多く，自主性や自己統の能力に 欠ける。
	6:0	2:5 (40)	30	24	21	24	30	36	36↑	30↑	24	0:10				
MC	4:2	1:7 (38)	36	30	24	24	21	36↑	36	21	21	0:10		2歳10ヶ月の時に，言葉の遅れを主訴として，当施設へ来所。	父(42歳)自営業 母(36歳) 姉(10歳) 妹(5歳) 母親は，理解があり受容的で本児への対応も良い。	自発性，自主性に欠け，集団の中での発声もみられない。
	5:1	2:2 (43)	36↑	36	30	36↑	30	36↑	36	24	30	1:0				
MM	5:2	1:3 (24)	36↑	24	21	21	21	36	30	24	21	0:9		3歳2ヶ月の時に，言葉の遅れを主訴として，当施設へ来所。	父(33歳)会社員 母(33歳) 妹(2歳) 母親は，本児にたいし同年齢だが，自発語に乏しく，やや消極に欠ける。	固執行動，通常等，集団への参加が悪く，自己の文脈で行動することが多い。
	6:0	1:11(32)	36↑	21	21	21	21	36	36	24	18	0:10				

者からの働きかけに無反応，の6種類に分類する。また「インタラクションの内容」として自発的言語行動を，若葉(1978)を参考にし，呼びかけ・要求・質問・報告の4種類，応答的言語行動を拒否・不適切な応答・消極的応答・積極的応答・無反応の5種類，計9種類に分類する。(2)これらの分類項目の生起頻度を発声を伴うか伴わないかに分けて各児毎に測定する。(3)達成行動項目の変化，各コミュニケーション行動の生起頻度の変化による指導経過の検討を行なう。

＜結果＞

1) 達成行動の変化

チェックリストに基づいたセッション毎の変化については Table 2に，また＜買い手のあり方＞，＜乗り手のあり方＞の変化については Fig. 1, Fig. 2にまとめた。3児のⅠ，Ⅱ期の変化を以下に概観する。

IS：Ⅰ期の買い物ごっこでは前半に買い手，半ば頃から売り手を選択している。セッションの後半では言語補助は減少しているものの他児を誘うまでには至らなかった。しかし役割交代ができ，役割に応じた適切な行動がとれるなど場面理解がすすんでいる。Ⅱ期のバスごっこでは，S4以降はMMがバスに乗らず押し手になることが多かった。

MC：Ⅰ期の前半は買い手，後半は売り手の役割を選択している。売り手はISが売り手をした後に言語補助で選択することが多かった。Ⅱ期ではⅠ期よりも早い時期に乗り手，押し手双方の役割をとり，S10では言語補助なしで役割の遂行ができている。しかし信号の理解という認知課題は後半まで言語補助を必要としている。

MM：Ⅰ，Ⅱ期ともS3までは退室が多かった。Ⅰ，Ⅱ期とも買い手，乗り手にはなり得ても売り手，押し手の役割選択はできなかった。しかし他児への誘いかけがⅡ期で観察されている。またⅠ期の買い物ごっこ場面では要求行動の表出が頻繁に観察されたがⅡ期では減少し

Table 2 達成行動の変化

		買い手のあり方	売り手のあり方	役割の選択	数・記憶	誘い掛け
Ⅰ期 買物ごっこ	IS	品物を要求する（S4） お金を使用する(S6)	お客をよびこむ(S4)要求された品物を渡し言語補助のみで"お金"を要求する(S7)お金を要求する(S8)客に品物をすすめる(S8 以降)	Tの補助で売り手になるが、途げ出す(S4)言語補助で売り手になる(S8)売り手になる(S10)	"お金"のやりとりで2個を理解する(S7)言語補助の下に(S8)その後は補助なしに2語の指示を理解し記憶し売り手に品物を渡す(S9)	Tを誘うことはあるが他児を誘うまでにはならない
	MC	身体補助で欲しい品物を指差し(S1)、その後自発の指差し(S4)要求表現(S5)"お金"の使用へと進む(S7)	売手になり要求された品物を渡し"お金"を受け取る(S8) 言語補助されてお客に"お金"を要求する(S11)	言語指示されて売り手になる(S8)	その場で指示があれば買うが買うものを記憶して買うことはない。"お金"の受渡しはできるが枚数の区別はつかない(S10)	売り手の際Tの援助で呼びこみをする(S10) 言語補助の下に客と交渉する(S11)
	MM	ひとりで店に行く(S4)欲しい品物を指差す(S5)言語補助の下に両手を打ち合わせて要求表現をする(S10) 身体補助されて"お金"を使用し(S6)、一時"お金"を売り場に投げつける事が見られた(S8-S9)が、その後言語補助のみで手渡しが出来るようになる(S10)			言語指示された品物をひとつ記憶することができる(S9)	Tの身体補助で買い物に行き(S4)その後Tに誘われて買い物に行く(S6)が他者への誘いはみられない(S1-S11)
		乗り手のありかた	押し手のありかた	役割の選択	信号の理解	誘い掛け
Ⅱ期 バスごっこ	IS	駅からバスに乗り目的地で降りることができたが(S1-S3) その後、Mが乗るとバスに乗らなくなる(S4 以降)	Mに手だしされ、言語補助の下にバスを押す(S4) 目的地で止まり、道にそって押す(S1-S11)	Tがすすめた役に首をよこうとうなずく(S1)指差して自分のやりたい役をしめす(S2)Tの"乗ろうよ"の誘いを拒否し押し手のみを選ぶ(S4 以降)	色名の表出(S4) 色名と"すすめ""とまれ"の理解が可能(S1-S11)	発声による呼び込みをする(S8)
	MC	バスの乗り降りをする(S1)身体補助(S1)、言語補助(S2)でその後自分から目的地で降りる(S10)	バスを押す(S1)言語補助(S1)でその後補助なしで目的地で停車する(S10)	"一やる？"に身体補助されて答える(S1)自分から役割を選択する(S2)"一やる？"の誘い掛けに応じるだけ(S3)	言語補助で信号のルールを理解する(S1) 補助なしで信号のルールを理解する(S10)	
	MM	Tの動かすバスを見て乗りにくる(S3)自発的に乗る(S7)窓でバスを止めると降りるが動物園では降りず動物のペープサートあそびには終始不参加			信号をつよす(S4) Tをまねて色部分を指さし(S7)、"アア"と発声する(S8)	乗ろうとするISを後ろから押す(S4) Mと一緒に乗る(S7)

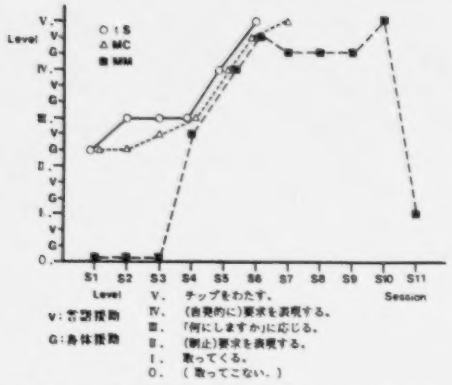

Fig. 1 ＜買い手のあり方＞における各児の変化

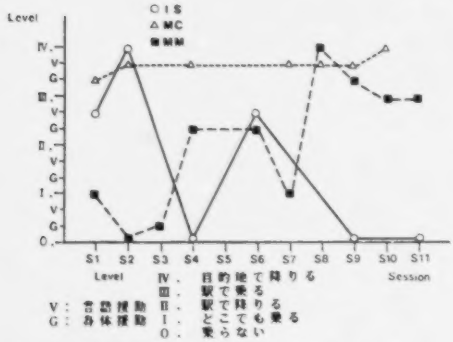

Fig. 2 ＜乗り手のあり方＞における各児の変化

ている。

2) コミュニケーションの変化：各児のコミュニケーションの水準のⅠ，Ⅱ期それぞれ前半，後半についての変化を Fig. 3 に示した。また，自発的発話の内容の割合を，Fig.4 に示した。

IS：Ⅰ期の買い物ごっこでは他者からの働きかけに応じる頻度が増加し（69→106），長いインタラクションⒶも増加した。しかし自発的な働きかけA，Bともに減少する傾向がみられた。Ⅱ期のバスごっこではⅠ期に比べインタラクション全体が減少したが，後半ではⒶ，Ⓑの応答的インタラクションは倍増している。内容面では自発的な呼びかけ，要求といった機能が中心で質問は全くみられなかった。拒否的応答，消極的応答が増加し，他者からの働きかけに無反応な状態は，Ⅰ，Ⅱ期を通し減少しつづけた。本児の伝達手段は大部分が音声によったが，そのほとんどが /ana/，/ada/ 等喃語と原初語の中間的な発声であった。

MC：Ⅰ，Ⅱ期を通して自発的な働きかけは各セッションで1－2回と極めて少なかった。しかしⅡ期ではⒶ，Ⓑの応答的インタラクションがともに2倍近くに増加した。Ⅱ期のバスごっこの前半ではⅠ期の後半に比べ，応答的インタラクションは減少したものの，後半にはⒶの長いインタラクションが増加している。また働きかけに対する無反応はⅡ期全体ではⅠ期の半分以下に減少した。本児の伝達手段は大部分が非音声的な行動によった。

MM：Ⅰ期の買い物ごっこで自発的な他者への働きかけ（A＋B＋C）の総頻度が14→23と増加した。また応答的インタラクションも22→45と倍増した。インタラクションの内容面では要求が増加した。Ⅱ期のバスごっこに入ってIS，MC共にインタラクション全体が減少し，後半では更に減少し，それに伴い他者からの働きかけへの無反応が増加した。内容面では呼びかけ・要求が後半減少した。本児の伝達手段は1/2－1/3が音声であったがⅠ期前半，Ⅱ期での要求における音声言語の比率が比較的高かった。

以上から，各児の2つのごっこ遊びでの達成行動とコミュニケーションは次のようにまとめられる。**IS**：Ⅰ，Ⅱ期とも後半は言語補助が減少し，自発的な役割遂行ができるようになった。2語の指示の理解など認知的側面でのやりとりが促進している。Ⅰ，Ⅱ期を通し後半にかけ他者への応答的な働きかけが増加したが，Ⅱ期ではMMに対する回避行動が目立ち対人的やりとり全体が減少した。**MC**：Ⅰ期ではISのとった役割をその数セッション後に経験していたが，Ⅱ期では早い時期に自分から役割を遂行するなど積極性がでてきている。Ⅰ，Ⅱ期で他者からの働きかけに応じやりとりすることが可能になった。Ⅱ期に入りやりとりの総数が減少したのはISと同様であったが，長いやりとりは増えた。**MM**：Ⅰ，Ⅱ期とも売り手，押し手といういわば他者からの働きかけに応じる役割の選択が困難であった。Ⅰ期で自発，応答的やりとりが増え，要求行動もよくみられた。Ⅱ期ではやりとり全体が減少した。

＜考察＞

Ⅰ期の買い物ごっこでは3児ともに，達成行動が高いレベルになるに従い，応答的インタラクションの増加が認められた。このことは買い物場面の理解や，売り手，買い手の役割の理解，といった買い物ごっこの認知的側面の改善が対人的コミュニケーションを促進したといえるであろう。Ⅱ期では対象児，指導者ともに同一のメンバーであったにもかかわらず，自発，応答のインタラクションともに減少した。これは協同あそびの展開を目標

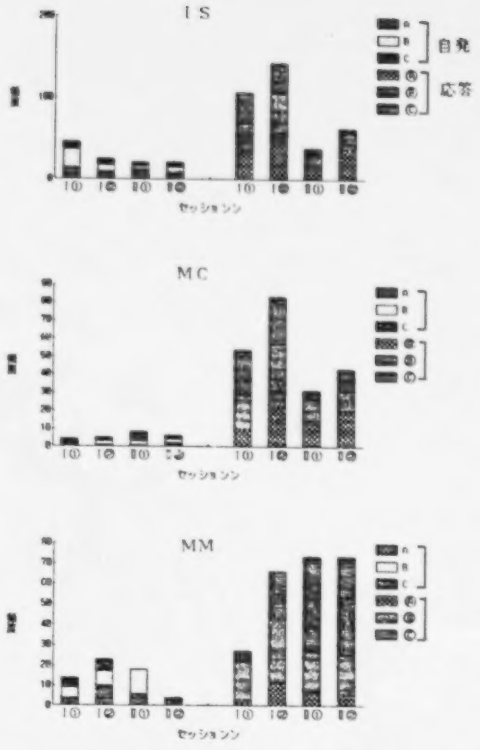

Fig. 3　インタラクションの形態

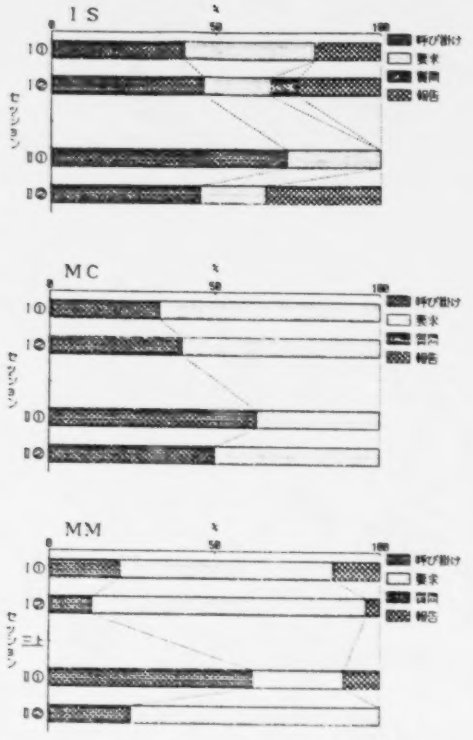

Fig. 4　インタラクションの内容（自発的発話）

にしたバスごっこが各対象児にとっては，買い物ごっこに比べ認知水準をかなり超えていた側面が多かったためといえよう。

買い物ごっこは固定された設定空間の中で対象児が移動し，相手と1対1のやりとりをするという比較的単純な構造を持っている。それに対し，一方のバスごっこは場面自体が移動（バスが動いて～へ行く）するため，非現前的な空間的，時間的概念の理解が必要とされる。さらに遊び形態としては1つの場面で各児が異なった役割を持ち，間接的にかかわる，より複雑な構造を持つための困難さがあったと思われる。また買い物ごっこが物を媒介とした遊びであったために，物を介したやりとりが成立しやすかったためといえる。特に自閉的な傾向をもつMMにとっては，状況の共有に依存したバスごっこよりは，物が介在する買い物ごっこの方がやりとりが容易であったと思われる。

このような2場面のもつ認知的側面の水準がコミュニケーションの水準に影響をもたらしたといえるが，このことは障害児においても認知発達とコミュニケーションの発達が密接に関連していることを示しているといえよう。

以上のような共通性の他に3児の個人差も大きかったといえる。3児の中で，ISが最もバスごっこに参加していたが，これはISが指導終了時のMAで2歳半ばであり，非現前的な概念形成の獲得過程にいたことと関連があろう。それに対し，MC，MMは指導開始時で1歳半前後，終了時で2歳前後という水準であり，ISに比べ非現前的な場面理解に一段階の遅れがあったためと考えられる。更にMMでは売り手，乗り手といった役割はとれても買い手，押し手といった役割への交代が困難であった。このような特徴は本児の＜対人的社会性＞の極端な遅れの要因となっていると思われる。

IS，MCでは自発的働きかけが増加しなかったがこの要因としては，前述の場面の困難性の他に，指導者の要因も考えられよう。すなわち徐々に援助を減らすという方法が十分に採られなく過度に援助を与えていたことも考えられる。

このように3児では，有意味語の著しい増加はみられ

なかったが，場面文脈の理解や，やりとりの増加によって，言語獲得の基盤が確立されつつあるものと思われる。今後はこのような前言語的活動から音声言語，有意味語の獲得にいたる経過と方法についての検討が必要であろう。また，言語の意味的な基礎となる概念の形成については個別指導との関連で検討される必要がある。

＜謝辞＞

共に指導と分析にあたった大島人美，宮下真知子，上嶋雅穂，太田一貴の各氏に感謝します。

引用文献

Bates, E., Camaioni, L., & Volterra, V. 1975: The acquisition of performatives prior to speech. Merrill-Palmer Quarterly, 21 (3), 205-226.

Bruner, J.S. 1983: Child's talk – learning to use language –. London: Oxford University Press.

Cooke, S., Cooke, T.B., & Appolloni, T. 1976: Generalization of language training with mentally retarded. Journal of Special Education, 10, 299-304.

出口　光・山本淳一　1985　機会利用型指導法とその汎用性の拡大－機能的言語の教授法に関する考察－　教育心理学研究，33, 4, 350-360.

藤原義博　1985　自閉症児の要求言語行動の形成に関する研究　特殊教育学研究，23, 3, 47-46.

Gallagher, T.M., & Prutting, C.A. 1983: Pragmatic Assessment and Intervention Issues in Language. College-Hill Press, San Diego.

後藤　守　1976　母子言語関係の成立過程に関する研究(1)－ダウン症候群の幼児と母親の言語関係の分析を中心に－　北海道教育大学教育部紀要，25, 9-21.

Halliday, M.A.K. 1975: Learning how to mean; exploration in the development of language. Edward Arnold.

小林重雄　1980　自閉症－その治療教育システム－　岩崎学術出版社.

小寺富子・倉井成子・山田麗子　1979　言語発達遅滞児の治療　笹沼澄子(編)　ことばの遅れとその治療　大修館書店

国兼由美子・渡辺なつ・長沢泰子・大石益夫　1985　やりとり遊びにおける音声言語の発現について(1)　特殊教育学会第23回大会発表論文集　426-427.

Lovaas, I.O. 1977 The autistic child: Language development through behabior modification. New York: Irvington Publishers.

大井　学・大井佳子　1986　渡し手と受け手との対話における不適切な語の使用への介入　教育心理学研究　34, 1, 48-54.

田中裕美子・竹田契一・里見恵子　ことばの遅れた子をもつ母親指導－INREALの適応の検討(1)　特殊教育学会第23回大会発表論文集　430-431.

若葉陽子・嶋田征子・飯島京子・他　1978　言語発達遅滞児の追跡的研究(5)　－チームアプローチの試み－　特殊教育研究施設報告　17.